

「暴支膺懲」の名のもとに開始された日中戦争は、明白な侵略戦争であった。伯父の岩崎昌治は、昭和12年(1937)9月、近衛工兵連隊小池部隊林隊に所属、上海に上陸、南京攻略に従軍した。中国で日本軍は何をしたのか―伯父の軍事郵便から、「南京大虐殺」とは何か、普通の日本人が兵士として加害者になつていったのはなぜかを考えてみたい。

「南京大虐殺は、昭和12年12月13日、日本軍が中国の首都・南京を占領したことにより引き起こされた事件である。この占領前から占領後の約二か月間にわたり、日本軍が捕虜や住民に対して行った殺害、放火、強姦、略奪など一連の残虐行為を「南京虐殺あるいは南京アトロシティーズ」という。日本軍に捕らえられた中国兵捕虜や民間人と南京郊外に連行された集団虐殺された。南京大虐殺が「敗残兵(捕虜)の

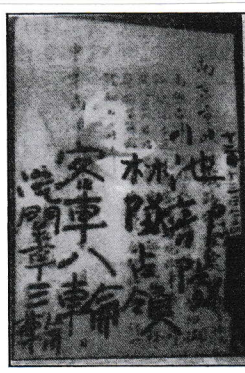
南京虐殺を伝える軍事郵便

集団的殺害(殲滅)―を意図した、紛れもない組織的な殺害であったことを、伯父(厚木市戸田)の書簡は伝えている。

12月17日付封書には「南京の下関駅(支那語でゲカンシヤキョウ)を工兵隊が占領したのが十四日未明です。時に敗残兵約八百名位我等工兵の手で揚子江の川べりで銃

殺しました。人を殺しているのか、竹でも河に流す気か自分でもわからな

いほどでした。本日(十七日午後二時三十分)は午前中付近を巡察して午後には休養して居ります。支那兵を陸上で殺したものを一カ所にあつめて石油をかけて燃やして居ります。丁度相川小学校位の広場は支那人の死体で二重三重になつて居りま



小池部隊林隊南京占領の落書

す。今日は南京の入城式です。其の為に昨夜城内に居た支那人を約五千名ばかり集めて本日の未明全部殺してしまつたのです。揚子江の河べりだけでも約五千名位の死体のごろごろして居ります。河に居る「イルカ」と言ふのが死体を食いにどんどん上がつて来ます」

この書簡が示すように、①「敗残兵の集団殺害」②「敗残兵別出という名で行われた兵士や市民の処刑」③「一般市民への残虐行為が、公然としかも組織的に行われたことがわかる。

加害の記録

これら日本兵の、南京虐殺の狂気の本質はどこにあったのだろうか。これを兵士の側からみると、第一に、日本兵の意識の底にあった中国人への差別と蔑視観、「勝つためには何をやってもいい」という身勝手な論理が背景にある。第二に、中国人を生活者とする認識が、中国人に敵対抹殺すべき存在として「支那人を見れば、やつつけろ」という単純思考へと兵士を頹落させた。第三に敵の殲滅は、皇軍のため、日本のためという「大義と聖戦」の思想に裏うちされたもので、それが兵士の郷里への鞏固な意識や家族への思い、報恩の意識を根底から支えていた。だから、戦争での殺戮は、残虐な心をもつた兵士によつてではなく、優しい心をもつた兵士によつてつくられたので、そこにこそ「戦争の狂気の本質」がある。戦争は兵士を狂気へと変えるのである。